

創建

そうこん

2010・3・25 VOL.44 NO.4 (通巻132号)

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

巻頭言／狩野勝重・1
子どもたちの健全な成長を願って／陽田秀夫・2～3
大学院特別講義報告（西出和彦先生）・4
大学院特別講義報告（吉野泰子先生）・5
修士学位論文／卒業研究発表会プログラム・6
卒業設計作品展／展示会等出展作品・7
スタンフォード大学からの便り 第3便・7
卒業式・修了式の表彰者／学術論文／教室ニュース・8

平成21年度、福島県高等教育福島県高等教育協議会から文部科学省へ提案をした「大学教育充実のための戦略的大学間連携プログラム」が、福島大学を基幹校として採択された。日本大学工学部も「大学教育充実のための戦略的大学間連携プログラム」における「エリアキャンパス・プログラム」の一員として参加することになり、平成21年10月19日、須賀川市と須賀川商工会議所の協力を取付け、共催という形で『住環境創生大学校 須賀川』を立ち上げることが正式に決まったところで、現在、4月開校を目指して準備に追われている処である。

大学校の目的は、学生自身がキャンパスから街に出て、実際の社会活動をサポートし得る知識と能力を身につけることであり、街の営みをしっかりと認識するための研修の場となるべき処である。本来であるなら、その活動の中には、小学生低学年の紛うことなき天真爛漫さ、老いて益々盛んな熟練の技術者の心意気、明日を夢見て集う若者たちの熱き心などが渦巻いている筈である。当然のこと、数多の学生諸君と街の人々が、『大学校』のフロアに集まり、侃々諤々、口角泡を飛ばして議論に熱中している姿を想像しながら・・・あ、これは夢か、と思う日を恐れつつ。でも、日本大学工学部の学生が将来的には新しい社会の担い手になるべく研鑽を重ねることが出来る場を少しでも提供できれば幸いであると考えている。

この『大学校』には二つの目的がある。その一は、言わずもがな、建築の枠を超えた大学生の幅広い思考形態の形成であるが、今一つ忘れてならないことが、地域に広がる知の輪の拡大であり、アカデミック・ミュージアムの展開である。大学における「知」の蓄積は、現在で見る

限り、大学の古ぼけた図書としてしか機能せず、埃に埋もれているのが実態である。中には、社会に発信することも疑問に思われる「知もどき」のものも少なくない。それらが、一度社会に発信された段階で、どのようなリアクションが得られるのか、学生諸君はしっかりと受け止める必要があるだろう。

そこで、『大学校』では二つの選択メニューを用意することとする。その一つは、ディスクリートで緩やかな縛りである。参加者は、4月に登録を済ませておけば、学生・社会人に拘ることなく研究会・講演会・ワークショップなどに参加できる仕組みであり、小学校低学年との会話や協働作業に親しむプログラムが用意されるであろう。

『住環境創生大学校 須賀川』 いま発進 教授 狩野勝重

一方、タイトでコンクリートなプログラムも用意される。そのプログラムは、一定以上の回数、用意された研究会・講演会・ワークショップに参加して、レポートの提出を義務付けられる（オープンデスクとして対応）ものである。こちらの部門では、ディスクリートなプログラム設定の中で子供たちに提供されるワークショップの準備も兼ねている。

その事業計画を挙げておこう。

事業計画

平成22年度の事業計画は3種類の活動からなっており、①学生の須賀川地域における活動、②須賀川地域における調査活動および③研究会の立ち上げによる可能性研究、である。

学生の須賀川地域での活動、

平成22年度予定

- ①木箱が創り出す空間概念の把握
 - ②竹のワークショップ（過去の副業の掘り起こし）
 - ③切り絵・折り紙による室内空間演出と「光と影」への試行
 - ④地域の祭りとの協働
- を中心に、なお、平成23年度以降は、
- ①子供にわかる簡単な木の構造理論
 - ②木造建築の基本的構造
 - ③壁に描かれた子供のころ
 - ④大学生による小学校三年生以下の子供教育実践
 - ⑤無農薬野菜カクテルハウス開催
 - ⑥お気軽ネット配信
 - ⑦その他、思いっ切り遊び心などを予定している。

『住環境創生大学校 須賀川』を開校するのに先立って、既に予備段階での活動が始まっており、昨年12月12日には「小布施まちづくり大学の所長である川向正人東京理工大学理工学部教授の講演会、年明けの1月7日には小布施視察と長野駅前再開発地区の研修会を敢行した。



「福島民報12面」
平成22年1月25日
より

因みに、『大学校』の所長は筆者、副所長は市岡綾子専任講師で、随時学年・学科を問わず参加者を受け付けている。待つ、申込み。

福島県建築文化賞正賞受賞記念



子どもたちの健全な成長を願って

楡葉町立あおぞらこども園

非常勤講師 陽 田 秀 夫

今回、「楡葉町立あおぞらこども園」で第28回福島県建築文化賞の正賞を受賞することができました。この業務は、福島県建築設計協同組合で受諾したもので、永山建築設計事務所と邑建築事務所の共同設計で、私は基本設計と全体総括を担当致しました。

楡葉町立あおぞらこども園は、国の「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」が成立して、平成18年10月にスタートした制度に基づく「認定こども園」です。認定こども園とは、幼稚園と保育所の両方の役割を持っていると認定された施設で、具体的には、①小学校入学前の子どもに幼児教育・保育を提供する機能、②地域における子育てを支援する機能を備え、県知事の認定を受けた施設をいいます。少子化の進行や子育てに対する保護者の多様なニーズに対応するためこの制度がスタートしました。

このプロジェクトは、楡葉町にある4施設（北保育所、南保育所、北幼稚園、南幼稚園）を統合して街の中心部に移し、認定こども園にしようとするものです。

設計の時点（平成18年）では、制度がスタートして間もないこともあり、ほとんど先進事例が無く、基本設計においては手探り状態でしたが、ハード的には「子育て支援施設を有する保育所」のイメージで、建築基準法上の用途も保育所としました。敷地は、田圃に囲まれた平坦地で形状も正方形に近く14,500㎡と面積的にも申し分のない広さを有しています。

楡葉町は、福島県の太平洋岸、いわゆる浜通りに位置し、気候的には冬期も日照時間が長く比較的温暖な地域ですが、冬期の季節風は強い北西の風が阿武隈山系から吹きおろします。そこで、建物全体の形状と配置は園庭を東南に配置し、建物を敷地の北辺と西辺に沿ってL字型の配置としました。子ども達が園庭で遊ぶとき厳しい季節風から護るため、極めてオーソドックスではありますが、単純明快な配置となっています。

設計にあたっては、次の7つのテーマを設定しました。

1. 健康
2. 安全性
3. プログラムへの柔軟性
4. 家庭的な空間
5. 子どものスケール感
6. 省エネルギー
7. 地産地消

この7つのテーマのうち1, 2, 4, 5については、特に子ども達の日線から考え、①採光や通風、シックハウスを考慮した内装材の選定、結露防止のための高断熱化等、健康と快適性の追求、②アプローチ部の歩車完全分離、非常時の避難経路の確保、家具等の出隅のディテール、遊具の選定等、安全性への配慮、③保育室やテラスの木質化等による家庭的な雰囲気創出、④天井高や窓の腰高等、子どものスケールに合わせた設計となっています。



子育て支援室外観



北側棟屋上から西側棟を見る



西側棟デッキテラスから北側棟を見る

プロフィール

1945年 福島県いわき市生まれ
 1968年 武蔵工業大学建築学科卒業
 1968年 ㈱創邑社建築設計事務所勤務
 1978年 ㈱呂建築事務所設立、代表取締役
 2002年 日本大学工学部建築学科非常勤講師
 2004年 福島県建築設計協同組合代表理事

主な受賞歴

・いわき市立草野心平記念文学館
 2000年 第18回福島県建築文化賞優秀賞
 2002年 第3回JIA環境建築賞入賞

・特別養護老人ホームいいたてホーム
 2002年 第20回福島県建築文化賞優秀賞
 ・特別養護老人ホーム玉川ホーム
 2003年 第21回福島県建築文化賞優秀賞
 ・只見町立只見小学校
 2004年 第22回福島県建築文化賞正賞
 ・特別養護老人ホーム梅の香
 2006年 第24回福島県建築文化賞準賞
 ・飯舘村公営住宅笠石団地
 2006年 第24回福島県建築文化賞特別部門賞
 ・楢葉町立あおぞらこども園
 2010年 第28回福島県建築文化賞正賞
 ・港が見える丘の家
 2008年 第18回ふくしま住宅コンクール最優秀賞

また、3については新しい制度による施設であることから、床の二重化や建築と設備の分離等、将来の空間の変更や設備の変更に対応可能な構造とするとともに、遊戯室等の大きな空間は可動間仕切で多様な使用方法が選択できるようにしてあります。

6については、ハイサイド窓や天窓を各所に配し、昼間は照明に頼らなくともよい明るい空間とするとともに、太陽光発電(10KW)も導入しております。

7については、町有林の杉材を板材として内部の壁各所に使用し、遊具の木材は県内産杉材、浪江町の大堀相馬焼の壁面レリーフ等を使用しています。

その他各所のディテールのデザインにおいてはできる限り「手造り感」を感じるデザインとしたつもりです。

《施設概要》

施設名：楢葉町立あおぞらこども園
 建設地：双葉郡楢葉町大字北田字中満地内
 主要用途：保育所及び幼稚園
 敷地面積：14,543.37㎡
 延床面積：3,812.75㎡
 構造：鉄骨造平家建(準耐火構造)
 地区地域：都市計画区域内、用途指定無、22条地域



3歳児保育室内観



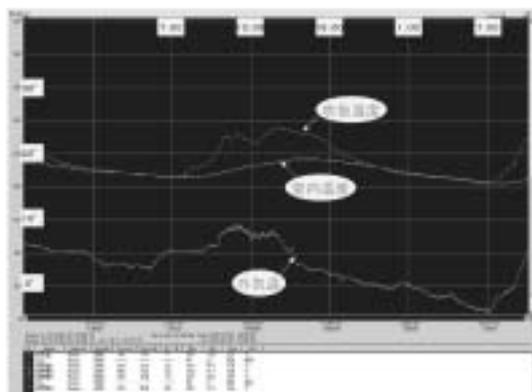
4-5歳児多目的ホール内観



絵本コーナー



芝張りの園庭で遊ぶ子どもたち



図表1 温熱環境(温度データ)

	平成18年度	平成19年度	平成20年度
	南保育所 北保育所 南幼稚園 北幼稚園	南保育所 北保育所 南幼稚園 北幼稚園	あおぞら こども園
	計 2,504㎡	計 2,504㎡	3,812㎡
ファンガス	607,836円	622,870円	-
上下水道	1,043,522円	982,284円	851,628円
電気	2,185,421円	2,236,059円	3,609,610円
灯油	1,467,246円	1,326,296円	976,854円
計	5,304千円	5,167千円	5,438千円
平米当り	2,118円/㎡	2,064円/㎡	1,426円/㎡

図表2 統合前後の光熱水費の比較

大学院特別講義報告

「人と人の間の心理と文化」(西出和彦先生)を聴講して

大学院博士前期課程1年 渡邊洋一

今回の大学院特別講義は、12月8日に70号館五十嵐ホールにて、院生・学部生・先生方含め約150人が臨席し、西出和彦先生(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授)による「人と人の間の心理と文化」と題して講演された。人と人の間にはたらく関係性について、スライドやジェスチャーを交えて、とても分かりやすくご教授頂いた。本稿では、講義内容の一部を紹介すると共に、筆者が考えたことを以下に述べる。

人は、人を取り巻くある程度の空間的ひろがりの中で暮らしており、西出先生が紹介された表現でいうと、「目には見えない泡のようなスペース」に包まれて生活しているという。講義では、このスペースを「間」と呼んでおり、人々はコミュニケーションや人間関係に応じて、

「間」の距離を使い分けられていると話されていた。身近な行動で探してみると、混んでいる電車の中で、お互いに不快にならないよう相手との距離や体の向きを調節することや、銀行などのATMでお金を出し入れする際、先に並んでいる人との距離を保とうとすることなどが挙げられる(図1)。いずれも、自分の「間」を調節し、相手の「間」に対して無意識に配慮しているといえる。

講義の中でも紹介されていた「かくれた次元」という名著も、良い機会だと思い読んでみた。この本の中で、著者である文化人類学者E. ホールは、人が取る距離を大きく4つに分類していた。それは、嗅覚、相手の体温、息の音、におい、感じなどを読み取ることができ、保護・慰め・格闘を意味する「密接距離」、親しい人と会話をする、手の届く範囲を限界とする「固体距離」、会社などで個人的ではない用件を行う「社会距離」、大勢を相手とする演説や劇などに用いられる「公衆距離」である。これらの距離は、距離による人の心理を反映した行為・行動によって分類されていた。講義の中でも触れられていた人々が距離を読み取りコミュニケーションを図り、また



図1 ATMに並んでいる人(筆者撮影)

コミュニケーションに合わせて距離を取っていることが再認識できた。また、人々はコミュニケーションや人間関係に応じて他人との距離(間)を使い分けており、「間」は行動やコミュニケーションによって柔軟に変化し、多様な意味を持っていることも理解できた。

人の「間」は、しばしば指示代名詞「これ・あれ・それ」を用いて捉えられる(図2)。この指示詞は日本語特有の空間の把握の仕方であり、「これ」と「それ」に該当する指示詞のみの外国人と接する場合には理解されないという話は、興味深いと感じた。人間行動により形成される「間」は、一種の暗黙のルール・秩序となり社会生活において大きな役割を担っており、この暗黙のルールは、生まれ育った文化に大きく影響されているということである。これからの日本社会は、グローバル化がさらに進むと同時に、異文化とのコミュニケーションが重要となろうが、誰もが同じ文化を共有して生活してきたと思われていた日本の中でも、今日、情報社会の拡大やサブカルチャーの細分化で、個人を形成しているバックグラウンド(生まれ育った文化)が極端に幅を持つようになった。それは、世代間のコミュニケーションを困難にしている大きな原因であると共に、同世代のコミュニケーションすら困難にしようとしていると思われる。そのようなこれからの時代に向けて、人の形成する「間」の心理と文化をきちんと見つけ、理解しようとすることをテーマとした講義内容は、人とコミュニケーションを図る上で、とても大切なことを教示していると思われる。

最後に、講義の終わりに西出先生の恩師である高橋鷹志先生が発言された、最近の若者の電車での行為についての話も、まさに相手を思いやるという「間」の心理に配慮が欠けている事例であり、こうした状況に応じた行動への配慮こそが人と人とのコミュニケーションを成立させる重要な事柄であるということが理解できた。

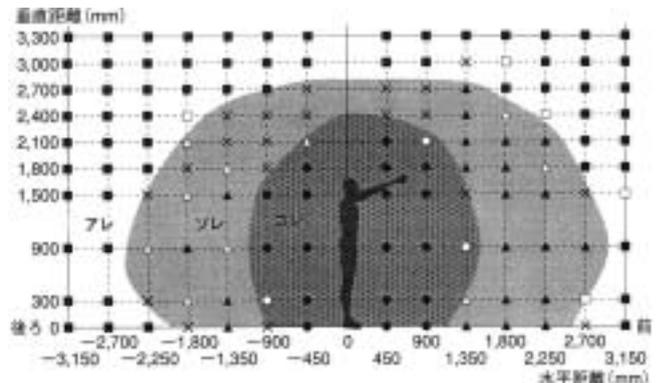


図2 指示代名詞「これ・それ・あれ」が利用される状況とその領域
*出典:「環境行動のデータファイル」高橋鷹志+チームEBS編著(彰国社)

大学院特別講義報告

「チベットの近代化と伝統建築（吉野泰子先生）を聴講して」

大学院修士前期課程1年 藤田 伶

2月5日に開催された大学院特別講義は、講師に吉野泰子先生（日本大学短期大学部建設学科教授）をお招きし、「中国チベットにおける高原居住環境特性に応じた新型省エネルギー住宅構想」と題して講演されました。これは、吉野先生の研究室と中国西安建築科技大学が共同で行った、13年余の共同研究の総括に当たるものです。チベット高原での住環境調査結果と省エネルギー住宅構想の紹介や、地産地消の大切さとサステナブル（持続可能）なライフスタイルについてお話して頂きました。

まず初めに紹介していただいたのは、チベットでよく見られる低環境負荷型土着建築（ヴァナキュラー建築）である客家土楼と、その土楼群を取り巻く景観についてです（写真1）。客家土楼とは、外敵から身を守るために山間部に建てられた集合住宅の総称で、円形のは円楼、四角形のは方楼と呼ばれています。木と土のみで作られた土楼群と、それを囲む高原の大自然との調和には、独特の美しさがあり、2008年7月に「福建土楼」としてユネスコの世界遺産に登録されました。

土楼の一つ一つはとても巨大で、その中では300人以上の人々が生活しています。今回紹介して頂いたのは多重環状の円楼です。円楼内部では、円周部に居住空間があり、中央部には共同の炊事場や井戸、家畜小屋などの施設があり、円楼の中心には一族の祖堂が置かれています。土楼内部にはいたるところに鮮やかな彫刻や装飾品、調度品などが見られ、仏教文化の影響が大きいことが伺えます。赤を基調とした色彩は、とても印象的で華やかさを感じました。

次に紹介して頂いたのは、ラサ市郊外に住む人々の、昔ながらの生活についてです（写真2）。ここでの生活はまさに「地産地消」を体現したものでした。人々は太陽の熱でお湯を沸かし、厳しい冬には屋外で保存食となるスペアリブを作り、調理には暖房と併用した兼用のストーブを使用します。ストーブの燃料には家畜の牛糞を乾燥させたものを使い、調理で残った残飯は家畜の餌となります。このような生活が、昔から現在まで続けられており、エコロジカルでサステナブルな生活であると言えるでしょう。

最後に紹介して頂いたのは、ラサ市で行われた住環境の実測調査についてです。この研究の目的は、住宅の近代化が進むチベットにおいて、伝統的なチベット住宅の性能実態を明らかにすることです。調査対象となったのは、コンクリートブロック造の集合住宅と、組石造の伝統民居、版建造の伝統民居です。これらを、光、温熱、空気、音環境から分析し、シミュレーションと比較検討したものを紹介して頂きました。

ここでは各実験の詳細な結果は割愛し、屋内外の温熱

環境に関するまとめを簡潔に紹介します。まず、冬季の屋内の温熱環境についてです。チベットの厳しい冬の寒さへの対策として、豊富な太陽エネルギーを利用したパッシブヒーティングの可能性や、地産のレンガ・石材によるダイレクトヒートゲイン効果を用いた改善策が挙げられていました。開口率を上げた伝統住宅と集合住宅を、シミュレーションと比較してみると、両者にそれほど大きな違いが無いことが分かりました。夏季の屋外の温熱環境については、天幕による日射遮断や、緑化によるクールスポット効果での改善策が挙げられていました。こちらもシミュレーションと比較してみると、伝統住宅と集合住宅に大きな違いが無いことが分かりました。

現在、チベットの人々の生活は急速な近代化を迎えています。多くの家庭に電化製品が完備され、インフラの整備も進み、人々の生活はますます便利で豊かになっています。しかしそのような生活の近代化の中、伝統建築が近代建築に飲み込まれていく光景をみて、多くの人が警鐘を鳴らしています。高いエネルギーを用いた近代建築に頼ることなく、プランニングの改善や天然資源を用いて住環境を改善することで、伝統建築がこの先、近代建築に駆逐されずに生き残っていく可能性を今回の特別講演で考えさせられました。

最後に、お忙しい中、貴重な講演をして頂いた吉野泰子先生にこの場を借りて深く御礼申し上げます。



写真1 福建省初溪村の土楼群



写真2 昔ながらの生活（ラサ市郊外）

平成21年度 日本大学大学院工学研究科建築学専攻 修士学位論文発表会

日時：平成22年2月17日(水) 場所：日本大学工学部 70号館6階 7061教室

1. 個別要素法による歩行者の動線シミュレーションに関する基礎的研究
－目標点順路を想定した正方形空間の歩行者流動について－
添野 祐平 (指導：倉田 光春 教授, 野内 英治 専任講師)
2. ねじ込み接合アルミ単層ラチスドームの座屈挙動に関する実験的研究
福田 大介 (指導：倉田 光春 教授, 野内 英治 専任講師)
3. 遺伝的アルゴリズムによる建築平面計画の最適化に関する基礎的研究
－住宅における評価指標と知的システムについて－
渡邊 康友 (指導：倉田 光春 教授)
4. 短繊維補強ポーラスコンクリートの基礎的性質
有岡 大輔 (指導：出村 克宣 教授)
5. 各種ポリマーセメント系接着剤を用いた CF Strand Sheet 補強 RC 梁の補強効果の評価に関する研究
岸 哲也 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
6. 環境負荷軽減を考慮した新規鋼製永久型枠を用いたRC造構造部材に関する実験的研究
寺田 健一郎 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
7. 児童の屋外空間における防犯性能に関する研究 及川 美帆 (指導：三浦 金作 教授, 土方 吉雄 准教授)
8. 医師の立場から見た病院建築の評価に関する研究
－地域の中核的病院を対象として－
太田 亮平 (指導：三浦 金作 教授, 浦部 智義 専任講師)
9. アーケードのある街路空間における来街者の歩行経路と行動パターンに関する研究
高木 彰 (指導：三浦 金作 教授)
10. 階段の基本的構成要素の変化が評価に及ぼす影響に関する研究
元田 草太 (指導：三浦 金作 教授, 浦部 智義 専任講師)
11. 新潟県中越沖地震における住宅被災と仮設住宅の居住実態に関する調査研究
飯田 裕樹 (指導：若井 正一 教授)
12. 飲食店における客の座敷選択行動の特性に関する研究
今井健太郎 (指導：若井 正一 教授)
13. 床の傾斜が歩行者に与える影響に関する実験的研究
北井 仁志 (指導：若井 正一 教授)
14. 小学校における児童の行動からみた生活空間のあり方に関する研究
－オープンスペースをもつ小学校を中心とした考察－
三浦 泉 (指導：若井 正一 教授, 市岡 綾子 専任講師)

平成21年度 日本大学工学部建築学科 卒業研究発表会

日時：平成22年2月8日(月) 場所：日本大学工学部 70号館1階 7014教室 (五十嵐ホール)

1. 地域活性化をもたらす廃校施設に関する研究 ー福島県内における廃校施設活用と比較ー
樫村 哲也 (指導：市岡 綾子 専任講師)
2. 高梨幸平と日東紡績諸建築に関する研究 ー木造建築物におけるデザイン要素の洋風化ー
高宮 知美 (指導：狩野 勝重 教授)
3. アーケード空間における来街者の行動特性に関する研究 (仙台アーケード2009)
鈴木 真実・柳沼 一輝・町田 皓章 (指導：三浦 金作 教授)
4. 郡山市中心市街地の自転車利用促進に関する調査研究 佐藤 慧介・鈴木 聖太 (指導：土方 吉雄 准教授)
5. 飲食店における配膳に必要な通路幅に関する実験的検討
星野 陽子 (指導：若井 正一 教授)
6. 応急仮設住宅の供給実態の変遷に関する研究
阿部 智史・内田 龍之介 (指導：松井 壽則 准教授)
7. 劇場・ホール施設のサイン計画に関する研究
久保田 和也・森山 緑 (指導：浦部 智義 専任講師)
8. 不思議音を特定する Expert System の開発
川上 元大 (指導：濱田 幸雄 教授)
9. 高性能遮熱塗料の開発
関根 圭祐 (指導：出村 克宣 教授)
10. インドにおけるCO2削減を目的とした無焼成レンガ作製方法の検討
安保 亮 (指導：Sanjay PAREEK 准教授)
11. 日本大学工学部16号館における耐震補強効果の検討
渡邊 徹 (指導：千葉 正裕 教授・日比野 巧 助手)
12. 既存建築物の耐震診断手法に関する研究
原田 亘 (指導：浅里 和茂 教授)
13. 非線形挙動に関する基礎的研究
徳永 裕子・笈川 学 (指導：倉田 光春 教授)
14. テンセグリティー構造の形態創生
山本 学 (指導：Buntara S. GAN 准教授)
15. 個別要素法による歩行者の動線シミュレーション手法に関する基礎的研究
小林 新司 (指導：野内 英治 専任講師)

平成21年度卒業設計作品展

今年度の卒業設計展は2010年2月1日(月)～5日(金)の5日間に亘り、70号館1階7012・7013教室にて開催され、22作品が出展した。最終日には例年と同様の形式でプレゼンテーションが実施され、午前のポスターセッ

ション形式を経て教員により投票された結果を基に、午後は10作品が各15分程度での公開プレゼンテーションを実施した。設計指導を担当される非常勤講師9名も参加し、活発な質疑応答・講評が行われた。(文責：編集係)

平成21年度卒業設計コンクール・展示会等出展作品

※講評会の投票に寄せられた講評の一部を紹介

- 日本建築学会「全国大学・高等専門学校卒業設計展示会」
永井 亮 (指導：浦部 智義 専任講師)
いきる階段 – バッテリー型プラン団地の再生 –
講評：既存建物への積極的リノベーション作品。厳しい条件に挑戦し、実際各地で起こっている問題に目を向けていて面白い。図面の完成度も評価。
- 日本建築家協会「卒業設計コンクール2010」
早川 真介 (指導：浦部 智義 専任講師)
街角大学建築学科
– キャンパスを捨て街に出よう –
講評：建築における3要素(まち、建築、手づくり)が伝わる秀作。緻密な調査と工夫に好感がもてる。
- レモン画翠「第33回学生設計優秀作品展」
- 近代建築「卒業制作'10」掲載
石賀 悠也 (指導：浦部 智義 専任講師)
砂中のローカル – アイコン・道標 –
講評：イマジネーションの豊かさを評価。新たな建築の可能性を感じる。発想が楽しい。

- 日本インテリア学会「第17回卒業作品展」
佐藤 春奈 (指導：浦部 智義 専任講師)
奥座敷で会津教育 – 観光から体感へ –
講評：プログラムと敷地がうまく絡んでいる。
- 学外展示作品 8 作品
(2月23～25日、会場：ビッグアイ 6階)
上記4作品のほかに、以下の4作品が展示された。
 - ・藤井 将司 (指導：浦部 智義 専任講師)
茨城国際刑務所 – 地方空港の有効活用 –
 - ・加藤 晃宏 (指導：松井 壽則 准教授)
イトをつむぐ、ヒトをつなぐ
– 中心市街地における生涯学習施設の提案 –
 - ・原田 直弥 (指導：松井 壽則 准教授)
出会いのかけら
– 都市におけるコミュニティーの形成 –
 - ・坂上 敦志 (指導：浦部 智義 専任講師)
下町スマイツリー
– 混沌・密集と安心・安全の共存 –

「スタンフォード大学からの便り 第3便：カルフォルニアライフの思い出」

博士後期課程3年 鈴木 裕 介

カリフォルニアライフも残り1ヶ月余りとなりました。最終便となる今回は、私が訪れた観光地とともにこちらで楽しんだ思い出などをお伝えしたいと思います。

私が特に印象に残った思い出を写真とともに紹介します。まずは、サンフランシスコの象徴的な建造物として有名であるゴールデンゲートブリッジです(写真1)。ゴールデンゲートブリッジから見える大地、アルカトラズが浮かぶ海およびサンフランシスコのダウンタウンを目にすると、アメリカの規模の大きさが垣間見えます。次に、こちらで知り合った日本人の友人らとともに旅行したロサンゼルスです(写真2～4)。世界的にも有名な地であるハリウッドやビバリーヒルズを観光できたことは非常にいい思い出となりました。他にも、Lake Tahoeでのスキー旅行(写真5)やNapa Valleyでのワイナリツアー(写真6)も非常に楽しく良い経験となりました。

スタンフォード大学内においてもJohn A. Earthquake Engineering Blume Center(筆者が所属する研究所)では、ハロウィンやクリスマスなどのイベントを含め、たびたび交流会が催されます。写真7は、年末に行われたウィンターパーティーにおける様子です。

留学生活も残り約1ヶ月となった現在の心境としましては、カリフォルニアライフでやり残したことは何だろうなど、焦りにも似たような複雑な感情です。残り約1ヶ月も今後の生活や研究活動に非常に有意義なものとなるよう、私自身なりに大切に過ごしたいと考えております。



写真1

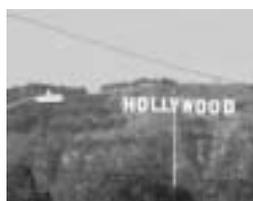


写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

写真7

平成21年度 卒業式・修了式における表彰者

平成22年3月25日

◇齋藤賞◇

修士論文「アーケードのある街路空間における来街者の歩行経路と行動パターンに関する研究」

高木 彰 (指導:三浦 金作 教授)

◇北桜賞◇

修士論文「環境負荷軽減を考慮した新規鋼製永久型枠を用いたRC造構造部材に関する実験的研究」

寺田 健一郎 (指導:Sanjay Pareek 准教授)

◇桜建賞◇

卒業設計「街角大学建築学科「キャンパスを捨て街へ出よう」

早川 真介 (指導:浦部 智義 専任講師)

卒業論文「アルミ単層ラチスドームに関する実験的研究」

小林 史明・齋藤 耕一・趙 敏浩・信田 大輔・三嶋 謙裕・成田 誉宜 (指導:野内 英治 専任講師)

卒業論文「高性能遮熱塗料の開発」

関根 圭祐 (指導:出村 克宜 教授)

卒業論文「高梨幸平太と日東紡績諸建築に関する研究「木造建築物におけるデザイン要素の洋風化」

高宮 知美 (指導:狩野 勝重 教授)

卒業論文「郡山中心市街地の自転車利用促進に関する調査研究」

佐藤 慧介・鈴木 聖太 (指導:土方 吉雄 准教授)

◇優等賞◇

徳永 裕子, 藤田 香里, 石賀 悠也

◇工学部長賞◇

学術・文化部門:石賀 悠也

2009年全日本学生建築コンソーシアム2009住宅設計コンペ「50年デザイン住宅」優秀賞受賞 作品名「暮らす丘」

学術・文化部門:早川 真介

第12回JIA東北建築学生賞 (日本建築家協会東北支部主催) 最優秀賞受賞 作品名「なかまちファーム」

第13回JIA東北建築学生賞 (日本建築家協会東北支部主催) 優秀賞受賞

作品名「大切な歴史を日常の風景へ」公会堂と市民プラザ

学 術 論 文

*届け出があった記事を掲載

- Sanjay PAREEK, Kenichiro TERADA, Yusuke SUZUKI: A FUNDAMENTAL STUDY ON FLEXURAL STRENGTHENING OF RC BEAMS BY PERMANENT STEEL FORMS, 4th International Conference on Construction Materials: Performance, Innovations and Structural Implications, ConMat09, Nagoya, Japan, pp.1314-1319, August 2009.
- 寺田健一郎, Sanjay PAREEK: 鋼製永久型枠を用いた RC 梁部材の力学特性に関する基礎的研究, コンクリート工学年次論文集, Vol. 31, No. 2, pp. 1651-1656, July 2009.
- 岸哲也, 鈴木裕介, Sanjay PAREEK: ポリマーセメント系接着剤を用いた CF Strand Sheet 補強 RC 梁の耐震設計法に関する一考察, コンクリート工学年次論文集, Vol. 31, No. 2, pp. 985-990, July 2009.
- Sanjay PAREEK, Katsunori DEMURA, Yusuke SUZUKI, Tetsuya KISHI: EVALUATION OF STRAND SHEET AS A NEW CFRP FOR FLEXURAL AND SHEAR STRENGTHENING OF RC BEAMS USING POLYMER-CEMENTPASTES, 9th International Symposium on Fiber-Reinforced Polymer Reinforcement for Concrete Structures, FRPRCS-9, Sydney, Australia, CD-ROM Proceedings, July 2009.
- 浦部智義: 公演時外の滞在者の分布と意識から見た劇場・ホールを持つ公立文化施設内のオープンスペースに関する研究ーホワイエを開放している施設における調査研究ー, 日本建築学会計画系論文集第647号, pp57-66, Jan 2010.
- 中山誠健, 積田洋, 浦部智義: 階段移動に伴う印象シーンの定量化と空間構成の研究, 日本建築学会計画系論文集第648号, pp335-341, Feb 2010

■川田尚弘君 (ブントラ研・4年生) と徳永裕子さん (倉田研・4年生) は, 10月25日に受験したFE資格試験に合格した (FE: Fundamentals of Engineering, PE資格の一次試験)。

■北井仁志院生 (若井研・M2) は, 12月25日, インテリア産業協会主催, 住まいのインテリアコーディネーションコンテスト2010学生プランニング部門において, 応募総数546作品の中から奨励賞 (10作品) を受賞した。その受賞作品報告会が, 3月14日にせんだいメディアテークで開催された。

■土方准教授は, 12月26日, 田村市より, 田村市都市計画審議会委員・

会長に再任された。

■若井教授は, 12月30日, 日本人間工学会評議員選挙において当選された (任期: 2年間)。

教室ニュース

■浦部講師・平野由朗非常勤講師・浦部研究室は, 第1回郡山アーバンデザインセンター・コンペティション「郊外の可能性」において, 「健康でいこうよ!」というテーマで応募し, 国内外からの応募総数178作品の中から2010年1月の最終選考に残り, 10位以内入賞を果たした。

■若井教授は, 2月1日, 白河市より, 都市計画審議会委員および都市景観審議会委員長を委嘱された。

■阿部直人非常勤講師は, 2月19日, 作品「小さな家」が, 郡山市より平成21年度郡山市景観まちづくり賞を表彰された。

■土方准教授は, 2月23日, 郡山市より郡山市市街地活性化シンポジウムのパネルディスカッション「みんなでつくろう まちなかの賑わい」のコーディネーターを委嘱された。

■訃報 ■本学科で永年教育・研究にご尽力いただいた池田昭男先生が8月3日に, 黒田浩司先生が1月1日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。